

カイヒメテントウ♂の採集記録と形態

伊藤 淳

〒183-0012 府中市押立町 5-1-25

A Collecting Record and Morphology of the Male of *Nephus kaiensis* (H. Kamiya, 1961) (Coleoptera: Coccinellidae)

Jun Irô

はじめに

筆者は東京都稲城市でカイヒメテントウ *Nephus kaiensis* (H. Kamiya, 1961) の♂個体を採集した。本種は山梨県甲府市産の1♀で記載された後、千葉県千葉市(原沢, 1976)・福井県三方町と大飯町(佐々治・斎藤, 1985)・静岡県(多比良, 2005)・岡山県岡山市(青野, 2009)から記録されているが、原記載以外には性別を記したものを見いだせなかった。従って、本種の♂として記録されるのは本報が初めてと思われる。

本報では、本種を東京都初記録として報告するとともに、♂の外部形態と交尾器形態について記す。

図1と3は歳清勝晴氏撮影、他の写真は筆者撮影のものである。

記録

カイヒメテントウ *Nephus kaiensis* (H. Kamiya, 1961)

1♂, 東京都稲城市向陽台(城山公園), 21. VII. 2018, 伊藤淳採集, 保管(図1-8)。

林縁の木のスイーピングによって得た。

外部形態

体長(前胸背前縁中央から翅端まで)1.75 mm, 体幅1.25 mm。体は黒く、無紋。触角は黄褐色。口



図1. 全形。

器は、黒い下唇基節と軸節を除いて褐色。腿節は黒褐色、脛節と跗節は黄褐色。頭部・前胸背の点刻はやや疎。触角は9節より成る(図2)。前胸背前角は前方に突出し、その先端は丸められる。小盾板は幅より

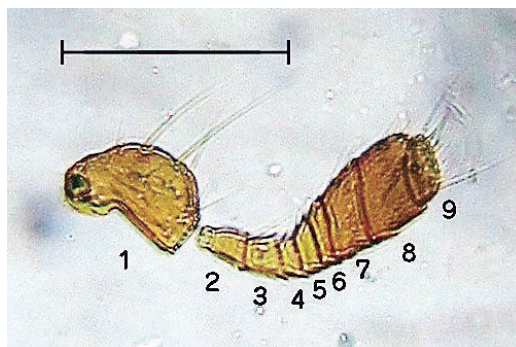


図2. 右触角(スケールバーは0.1 mm)。



図3. 腹部第1-5腹板。



図4. 腹部第6腹板。

少し長い。上翅は比較的密に、不規則に点刻されるが、点刻は互いに融合しない。上翅の毛は白く、S字状に流れる。前胸の基腹板は強く不規則に、疎に点刻される。前胸腹板突起は長さより幅広い。腹部第1腹板の後肢腿節線は不完全だが長く、第1腹板後縁に平行に伸び、側部で前方に曲がらない(図3)。第5腹板後縁はやや裁断状だが湾入しない(図3)。第6腹板後縁はわずかに湾入する(図4)。

日本産ホソヒメテントウ属 *Nephus* で黒色無紋の種としては、本種の他に、本種と同時に記載されたムモンヒメテントウ *Nephus konpirasanus* (H. Kamiya, 1961) がある。Kamiya (1961) によると、カイヒメテントウは以下の諸点でムモンヒメテントウから区別される(原文は英語)。

1. 前胸背はムモンヒメテントウのものよりわずかに幅広い。

2. 小盾板は幅より長い。
3. 前胸背の前角はムモンヒメテントウのものより鋭く角ばる。
4. 上翅の点刻はいくらか強いが、ムモンヒメテントウのものより明らかに弱く、互いに融合することはない。
5. 前胸の基腹板はたいへん疎に、またたいへん不規則に点刻される。
6. 前胸腹板突起は長さより幅広い。
7. 第1腹板の腿節線は前種（記注：ムモンヒメテントウ）のものより長い。腿節線の末端は基方に曲がらず、まっすぐで、第1腹節後縁に平行である。1と3については、ムモンヒメテントウを比較標本として見る事ができていないので判断できないが、原記載論文にある両種の全形図と比べると、本個体の前胸背の形はカイヒメテントウの図に似ているように見える。2, 4, 5, 6, 7については、本個体はカイヒメテントウの特徴に一致することが確かめられたので、本個体をカイヒメテントウと同定した。

また、ヨツモンヒメテントウ *Nephus yotsumon* (H. Kamiya, 1961) にも、ほとんど黒色無紋の個体が見られるが、この種は本種とは♂交尾器がはっきり異なるほか、より細長い体形と、触角・口器・肢が黒褐色～黒色であることなどで容易に区別できる。

交尾器形態

サイフォ（図5）は比較的太く、基半はほぼ半円を描き、後半はごくゆるい弧状である。先端部は小さく二又し、その背側に小さな三角形の膜質部がある（図6）。包片（図7-8）の中央片は強く左右

非対称。側片は中央片とほぼ同じ長さである。

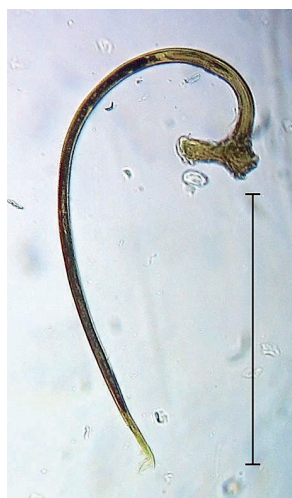


図5. 交尾器 サイフォ（スケールバーは0.5 mm）。



図6. 交尾器 サイフォ先端部。



図7. 交尾器 包片（側面）（スケールバーは0.5 mm）。



図8. 交尾器 包片（腹面）。

所属する亜属について

日本では従来、ホソヒメテントウ属 *Nephus* に亜属は用いられていなかったが、Löbl & Smetana (2007) では日本産の各種もそれぞれ亜属に割り当てられており、カイヒメテントウは *Nephus* 亜属とされている。この亜属は触角が11節（ただし基部の2節はほぼ合体している）であることを特徴とする（Fürsch, 1987）が、今回観察したカイヒメテントウの触角は9節であった。

筆者はやナギヒメテントウ *Nephus (Geminosipho) koltzei* (Weise, 1887) の日本初記録を報じた際、触角節数は同種内でも変異する形質であることを指摘した（伊藤, 2019）。したがって、この形質を重視した分け方で本属を亜属に分けることに疑問を持っている。また、現在用いられている亜属を認めたとしても、カイヒメテントウをどの亜属に入れるかは再検討が必要であろう。

以上のようなわけで、本報では学名の表記に際して亜属名を用いなかった。

謝辞

中村涼・斉藤明子・鈴木茂・多比良嘉明・高井泰の各氏には文献の御教示・御提供をいただいた。歳清勝晴氏には写真を撮影していただき、阪本優介氏には図の作成に御協力いただいた。以上の方々に厚く御礼申し上げる。

引用文献

- 青野孝昭, 2009. 岡山県産甲虫類若干の分布資料. すずむし, (144): 43–49.
- Fürsch, H., 1987. Übersicht über die Genera und Subgenera der Scymnini mit besonderer Berücksichtigung der Westpalaearktis (Insecta, Coleoptera, Coccinellidae). Entomologische Abhandlungen des Staatliches Museum für Tierkunde in Dresden, 51 (4): 57–74.
- 原沢みち子, 1976. 千葉県末広・千葉寺町のテントウムシ類. 千葉敬愛短期大学生物研究会会報, (8): 39–40.
- 伊藤 淳, 2019. 本州におけるヤナギヒメテントウ (新称) の日本初記録. さやばねニューシリーズ, (35): 42–46.
- Kamiya, H., 1961. A revision of the tribe Scymnini from Japan and the Loochoos (Coleoptera: Coccinellidae) Part 1. Genera *Cli-*

tostethus, *Stethorus* and *Scymnus* (except subgenus *Pullus*). Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University, 11 (3): 275–302, pl. 38.

- Löbl, I. & A. Smetana (eds.), 2007. Catalogue of Palaearctic Coleoptera, vol.4. 935pp. Apollo Books, Stenstrup.
- 佐々治寛之・斎藤昌弘, 1985. 甲虫目 COLEOPTERA. 福井県自然環境保全調査研究会昆虫部会編, 福井県昆虫目録, pp. 79–245. 福井県.
- 多比良嘉晃, 2005. コウチュウ目. 静岡県環境森林部自然保護室編, 静岡県野生生物目録, pp. 107–163. 静岡県環境森林部自然保護室, 静岡.

(2020年3月20日受領, 2020年5月1日受理)

【短報】沖縄島におけるアオムネスジタマムシ成虫の11～1月の採集記録

アオムネスジタマムシ *Chrysodema dalmanni* (Eschscholtz, 1837) は、奄美諸島以南の琉球列島、台湾、フィリピン、インドネシアに分布する (大桃・福富, 2013). モモタマナにつき、成虫出現期は5～8月 (黒澤ら, 1985; 福田ら, 2009; 大桃・福富, 2013) とされているが、冬季 (12～2月) における採集例も知られている (楠井・楠井, 2006; 楠井, 2006; 小浜, 2012; 長田, 2016; 瑤寺・吉武, 2017; 比嘉, 2018). 筆者は沖縄島において、2016年から2018年にかけて11月, 12月, 1月に本種を採集しているので追加記録として報告する. そして、今回の記録を含め、これまでに知られる時期的に遅い本種の採集記録についても併せて報告する.

1♂, 12. XI. 2016, 沖縄県西原町千原 (沖縄島); 1♀, 31. I. 2017, 沖縄県西原町千原; 1♂, 9. XII. 2018, 沖縄県西原町千原. 以上、筆者採集, 琉球大学博物館 (風樹館) 保管.

いずれの個体もモモタマナの木の下、地上または地上付近で静止していた. 2016年11月12日に採集した個体は、モモタマナの樹上から飛来し、地上に静止したものであった. 採集した個体はいずれも体 (特に腹面) に黄色粉の付着が多く、羽化後それ



図1. アオムネスジタマムシ♀ (2017年1月31日; 沖縄島).

ほど日数がたっていないように見えた (図1).

表1は、今回の記録3例を含め、これまでに報告された11月から2月における本種成虫の採集記録をまとめたものである. 個体数は多くはないが、本種は冬季にも発生していることがわかる.

引用文献

- 福田晴夫・山下秋厚・福田輝彦・江平憲治・二町一成・大坪修一・中峯浩司・塚田 拓, 2009. 増補改訂版昆虫の図鑑. 採集と標本の作り方. 261 pp. 南方新社, 鹿児島.

表1. アオムネスジタマムシ成虫の秋冬季 (11～2月) の採集記録.

採集日 (個体数)	採集場所	文献
2006年1月4日 (1 ex.)	沖縄島那覇市	楠井・楠井 (2006)
2006年2月8日 (1♂)	沖縄島那覇市	楠井 (2006)
2011年12月5日 (1 ex.)	津堅島 (沖縄県うるま市)	小浜 (2012)
2015年12月7日 (1♂)	沖縄島西原町	長田 (2016)
2016年11月12日 (1♂)	沖縄島西原町	小浜 (本記録)
2016年12月4日 (1♂)	奄美大島奄美市	瑤寺・吉武 (2017)
2017年1月31日 (1♀)	沖縄島西原町	小浜 (本記録)
2018年1月30日 (1 ex.)	沖縄島中城村	比嘉 (2018)
2018年12月9日 (1♂)	沖縄島西原町	小浜 (本記録)